

1) R. S 60代

2016年7月24日(日)

経験と知恵が、自分の中で次のステップを見つけていくんじゃないかと思います。3.11を忘れないでほしい。私たちが、こうやって石巻で生きてるんだということを。テレビや報道と現実は違う時もあります。自分の生活では、100%の目標が達成しなくとも、いいんじゃないかと自分では思っています。

東京で退職し、震災の前の年2010年11月に、母の暮らす実家、石巻に帰郷、そして翌年3月に被災。60歳で退職後、ゆっくり自分の好きなことをして過ごそうと考えていて、まだ引っ越しの荷物をほどいていないものもあり、読もうと思っていた本も流されました。死なずに生かされ、生き残ったのです。同級生は行方不明。打ちのめされたままではいけないし、こうなっちゃったことを受け入れるしかありません。

することもなく、2014年8月にカフェを開きました。家族の食事を作った経験しかありませんでしたけど。ボランティアが片付けきれいにしてくれたので助かりました。津波の後の、荒涼たる風景を見て、人が集まる場所を作りたかったのです。近所の美容室が再開し人が集まっていたのを見て、ほっとしました。仮設の閉じこもりがちだった知人に声をかけたら、カフェを手伝ってくれることになったのです。福祉の仕事をしていろいろな人と会って、苦情も前向きに対応していました。相手を受け止める性格かもしれないですね。こういうことがあるんだなあ、こういうことが起こるんだなあと3.11を思います。呆然として、2週間、避難所にいました。灰色とがれきの中で、人の気配を作りたい、人がいるんだということを知らせたくてカフェを思いつきました。春が、枯草から新緑が芽吹くようなイメージ。仮設の見回りの仕事をしました。避難所から、みなし仮設に移りましたが、狭い2部屋でじっとしていただけませんでした。

自然の威力はすごいですね。自然を征服したいなんて考えないことね。怖いことは避け、津波が来たら逃げること。

以前は、海水浴客の声が風によって流れてきた海辺。低い防波堤があっただけ。荒れる日も、きれいな日もあるのが海。ずっと前に、大きな漁港ができて、水の流れが変わって砂浜が持っていかれたのが寂しい。ここは3.11のずっと前、遠浅の海きれいな海で、私が子供のころ、広い砂浜で海にたどり着くまで足が熱くなったの。津波より、漁港ができたことが辛い。昭和35年のチリ津波を防波堤から眺めていました。ここは安全だと、逃げなかったのです。

3.11では、運転中、松林から波が見えました。深い林だと思っていたのに、そうでもなかったのです。強い地震の後、「やっぱり津波が来た！」と。車のラジオでは津波！と言っていました。車のバックミラーで振り返りつつ逃げ、左へ曲がると外に知人の男性が立っていました。くるぶしまで水がきていました。寝たきりの母親を乗せてくれる車を待っていたらいいのです。二人で、二階へ母親を運ぼうと階段を上りかけたら一気に津波がきて、急いで2階へ。死にたくないと思いました。その母親に布団を重ねてかけて、寒さをしのぎました。二階から、山へ流れる津波を見ていました。

自分で納得しないと前に行けないし、知識だけでなく想像力も大切ね。こだわり続けているとはっと気が付いて、答えが見つかる時があります。すぐではなく、ピッと結びつく時がくるので、次の展開まで待つことも必要です。準備期間です。誰かが言っていたけれど、赤ちゃんのハイハイのように順番をおって立つようになり、階段を一步づつあがるように。退職後は遊んでいたかったです。今は自分の時間がないです。5年をめどにカフェを開店して、面白く楽しかった。明日になったら陽が上り、開けない夜はないんです。3. 11の日に、二階でじっと朝が来るのを待っていたように、ずっと同じはないんです。あなただけじゃない、誰かが気にかけているよ、一人じゃないよ、心配している人がいるよというメッセージが必要です。被災したのは私だけじゃないから乗り切れたのではないのでしょうか。次の展開も考えています。カフェに、いろんな人がいろんなことを抱えて来るのですが、一生懸命生きて立ち上がろうとしています。

東京はもういや。高層ビルでお日様もろくにあたらなくて、窮屈。便利だし何でもあるけど、もう住みたくありません。

花を植えてくれるボランティアもカフェに来て、ヨガ教室や絵手紙教室も開催しています。このカフェの名前は、フランス語で海という意味。なんとなく青のイメージが浮かんで、青い空と青い海のカフェです。じたばたしても海とつきあっていくし、開き直りね。

2) Y. S 60代

2016年7月27日

日ごろからの防災意識が大切です。こなす教育でなく、創る教育へと見直して、子供を中心とした創意ある教育です。私は若いころ、大変な仕事だから教師にはなれないと思っていました。教師を尊敬していました。大学を卒業して、1年半、会社の経理を担当していました。ある日、会社でそろばんをはじいていた時、耳の中でキンコンカンコンという音が鳴ったのです。そして会社を辞めて、学校の非常勤の講師になりました。子供達にもっと向き合いたいと思っていたら、疎外されていた3人の女子の生徒が直訴してくれ、校長によばれて教員になったらと助言されました。子供がつないでくれた私を活かしてくれた夫に感謝ですし、切迫流産や子育ても大変でしたが、たくさんの先輩から指導をうけすばらしい先生から学びたいという気持ちでいっぱいでした。

授業作りと行事を中心とした学校運営をしました。自分の命を守る安全教育です。先生方もまとまって、つながって共有し学校全体で、組織体でいい集団をつくったと思います。指導案から変えて子供が変わってくるのがわかります。保護者の意識改革も試み、子供を大切に共に子育てし子供が生き生きとする居場所のある学校です。3. 11の日は、訓練通りやっただけやっただけです。日ごろから、先生も子供も真剣に訓練にとりくんでいました。99.9%、大地震がくると予測していたので、安全指導をやってきました。日常的に廊下を静かに歩き、朝会や集会ではすばやく並び、先生の言うことを聞き取り組みです。退職まで3年という限りある中で、だんだんと時間をかけてやってきました。“桃花笑春風”という言葉で3. 11の集会で子供達に伝えました。これからつらいことがあるけ

れども受け止めて生きるんだよと。子供を伸ばしたい、校長としてこういう学校を作るといふビジョンを持って、いいものを作り出したい、心に灯をともし先生になりたいと思っていました。父の影響かもしれません。出会いとつながりを大事に、ぶつかってのりきった、33年間の教師生活は、子供達にたくさん教えてもらいました。子供達に感謝。一方的でなくお互いに教えあったのです。いい授業は、自ら考え表現し、判断の力をつける授業です。立ち止まって振り返りながら。

被災後、神戸へ転校した子供が、「上がれ！」と必死に守ってくれた先生のことを話してくれました。被災した学校の校舎を遺構として残したいです。3.11の日は、校庭で津波のサイレンを聞きました。とっさの判断で、230人の子供達とすばやく高台へ避難しました。地域の人も一緒に避難し、子供達に私たち大人も救われました。後で、バーナーで開けて、金庫の卒業証書を出しました。

震災の年に生まれた子供が小学1年生です。事実を語り、伝える使命をやり遂げたいです。戦中、生き抜いた教員は、どんなに辛かったでしょう。強いですね。私たちは、自然災害でも強く生き抜かなくては。

3) M. Bさん 60代

2016年8月10日

大きな揺れで、ただごとでないと思ったけれど津波は予想していませんでした。会社で働いていました。車の近くに行くと、フェンスに止まって逃げないカラスに、「何か起きるの？」と聞きました。石巻市内の家が心配で、ひたすら前の車について運転しました。70kmのスピードで。街では人がのんびり後片付けしたり、おしゃべりしていました。スーパーへ行ったけれど、すでに列。日和山から海を見ました。おしゃべりしながら、日和山へ登って来る人。ラジオでの荒浜のニュースで、ただ事ではないとわかりました。ラジオは仙台のニュースばかり。「女川全滅」のニュースに、放心。自分で確かめなくちゃと、車の中で暖をとりつつ夜十時まで起きていて、それから服を着たまま寝て、朝になったら夫を女川へ迎えに行こうと考えました。夫は小学校の教員で、連絡が付きませんでした。こんな大きい地震だから児童達の世話で当分帰ってこないだろうと直感。次の日、市街に船が上がっていて、歩けません。女川まで歩こうと決めました。3月12日の朝、立町で炊き出しがあり、知らない人に「食べていけ」と言われ、ありがたかったです。知り合いのすし屋がプロパンで炊いたご飯をくれました。近所の人もプロパンで炊いたご飯を分けてくれました。5日目の朝、夫の無事を確認でき、生きていたので安心しほっとしました。教員である夫は、これからはしばらくは子供達のために仕事し、家には帰ってこないだろうと思いました。

3.11の夜は、火のついた海が山に迫って来ました。先入観はいけないのでラジオをつけませんでした。前の日、友人が津波に注意しようと言っていたばかりですが、その彼女は亡くなりました。戦後の焼け跡ってこんな感じ？黙ってみんな歩いていました。2週間後に夫と再会。風呂に入れ豚汁を作って食べさせました。しばらく私は仕事に集中しまし

たが、疲れ果てて、秋田の海に行って、魚を食べたいと思いました。

考えるよりまず先に実行する性格です。自分だけじゃなく周りも同じく被災したので、なんとかかなると思いました。後で夫から聞きましたが、学校のある高台から黒い壁の水が見えたそうです。もっと上へ児童を移動させました。親が迎えにきても帰しませんでした。5台の防災無線がだめ。女川のマニュアルには、地震があつたら津波がくるとあるそうです。私は若いころ遠方から嫁に来て、自分から求めると近所が助けてくれました。震災の後も、普通の付き合いが助けてくれました。お互いの声掛けが大切です。心を開くこと。今の若者は人とかかわるのが面倒、希薄な人つきあいなので、これでいいのでしょうか？

人が好き。私がやります！と手をあげるタイプです。家の司令塔。中学まで暗くて人に近づけなかったのですが、これは損と気がつきました。赤十字のボランティアをはじめ高校時代からは、はじける性格になりました。子供の世話が好きです。

夫も無事で、自分は仕事も家もあるので、被災者じゃないと思います。それが後ろめたい。たくさんボランティアが活動し、知らない人達とすれ違い、慣れ親しんだ町が違う場所みたい。口をあけて待っているだけの被災者でいいのでしょうか。復興って？石巻の人の間でも温度差があります。立ち止まって考えつつ、そろそろ自立も考えなくてはいけないかもしれませんね。

流れついたサンマを背負い山をあがってきて、サンマを煮ました。かまぼこをもらったり、米を譲り受けました。被災した人達を自宅に招き、風呂に入ってもらったり、洗濯もしてもらいました。先を考えるタイプじゃない。現在が精一杯。過去も未来も見つつ、今日一日満足ならそれでいい。出会いや時間も、その日、その日が大きいです。悩むことがないんです。悩んでもしかたないし解決しないから。子供のころ本をよく本を読みました。小学校のころ、天気がいいので山へ行こうと先生が言いました。故郷は、高い山があり、山を見上げる見る生活でしたから、上をむく視線で違うものが見えると思います。

今は、立ち直り人に伝えたいことを積極的に発信することが楽しいです。

4) A. Sさん

2016年8月21日

失ったものが大きいけれど、それ以上に得たものが大きく感謝しています。2011年の夏に家の修復が始まり、知り合いの大工さんが来ました。10月に排気口から迷いネコが顔をのぞかせていて、ボロぞうきんのようで毛玉だらけでした。すり寄って来るので前に誰かに飼われていたのでしょうか。この被災猫はPTSDかもしれなくて、空を見てパッと走り出すパニックになることがあります。よほど怖い思いをしたのだらうと想像できません。

被災を通じて感じた、人の優しさや思いやりは、普段では経験できないことでした。被災時、夫は病気で3～4年も寝たり起きたりで、強い薬を服用していました。娘も離婚するかもしれないという状況でした。夫がほとんど寝たきりになり、私がすべて自分でやらなくてはいけなくなった時、やればできるんだという新鮮な驚きがありました。泣いてい

る暇がなかったのです。あるテレビタレントが、3. 11の直前に「逃げずにすべてを受け入れよう。人生は修行。」と言っていたのを思い出します。

津波は玄関から入ってきて家に2m上がりました。夫と猫と一緒に、とっさに二階へ上がりました。2階に避難してみると、辺りはすべて水没していて、みんな同じなのだ、一緒だと安心しました。それから、神戸へ行く機会があり、20年以上経った神戸の復興を見て、すばらしいと感動し、石巻も前を向いてやれば大丈夫だ、人の力はすごいと確信しました。神戸に旅をしてよかったです。

3. 11の次の日、隣の夫妻が小学校へいったん避難したのだけれども、家にもどってきて食料をつめて、また小学校へもどろうとしたら津波にあったようです。我が家は、パン、水、菓子パン、布団がありました。8枚切りの食パンがあって、これで一週間もたせようと夫に言いました。隣の夫妻に窓越しに聞くと、そんなに食べ物がないというので、菓子パンをビニール袋へ入れて物干し竿につるして渡しました。すると、しばらくして水がお返しにもどってきて、それから、おこわや納豆など何倍にもなってもどってきました。無心で人を助けたいと私は思っただけですが。犬のおしっこ用の袋があって、トイレ代わりで、10日は大丈夫だと思いました。3. 14になっても水がひきませんでした。数日して、やっと下に降りて、下駄箱の引き出しに上がって、泥の中で靴を最初に集めてよせました。仙台の息子が迎えに来て3月末10日ほど、息子の家で暮らしました。仙台に行くとき、隣の奥さんの娘さんが、できたてのぼかぼかのおにぎりをくれて、おいしい！人生で初めての味と感激しました。仙台では病院から薬を無料でいただきました。仙台は電気もありテレビも見れて、別世界でした。

あの3. 11の時、二階でこれ以上、水がきたら寝たきりの夫を板に乗せて流そうと決めていました。押し入れの一番高い所に板があったので。猫には癒されました。猫は我慢していたのか、3日目におしっこをいっぱいしたんです。私が紙をちぎってトイレを作ってあげたから。

辺りは、車がひっくり返ってがれきの山でした。車で20分の実家に、3月30日からお世話になり、実家のありがたさが身にしみました。以前は二か月に一回ぐらいしか行かなかったのにね。実家から石巻に通ってきて片付け。普段は交流のない妹や兄が助けてくれ、なんてありがたいのだろうと思いました。期待していなかったのです。二階で、ガスコンロでカップ麺を作ってみんなで食べて楽しかったです。夫が3. 11を契機に、ちょっと元気になりました。震災直後は、どうして誰も助けに来ないの？と疑問でしたが、道路もないのですから、これじゃ誰も来れないとあきらめました。

独身の時は海外協力をしたくて、ずっと外国に行きたかったです。中学の時、英語の文通もしていました。洋裁の仕事を26歳までやって、結婚し、27歳で出産しました。娘は小学校でいじめにあい、10年も引きこもりで、大学へはいったのですが、すぐ退学しました。私には試練でしたが、乗り越える力があるにちがいないし、娘も苦しみ悩んでいると納得しました。かくしてもしょうがないので、娘のことを誰にでも言うんです。オー

ブンな性格です。東京で娘のアパート探しをしている時、泊まったホテルで、コーヒーを飲んでいたら、他人に話しかけたんです。「人生って大変ですね」と。すると「どん底って長く続きませんよ、以外と抜け出せますよ。どん底って思わない方がいいです。」と、その見知らぬ人から返ってきました。「そうなんだあ」と希望が持てました。引きこもりの子供を持つ家族会も、助けになりました。

私は直感で動くタイプ。さしあたって何をしたらいいのか、直ぐに決断します。考えてもしようがないですもの。マザー・テレサが、隣人を愛みなさいと言っていたのをテレビで見て、私はずっと主婦だったけれど、貧しい人に何かしたいと、あせりともどかしさがありました。心が折れるのはだめです。この5年を振り返り、あまりにも恵まれ幸せだと実感しています。雨の日が好きで、安心します。夫の介護に疲れて爆発した時、知人が「よかったね」と言ってくれて嬉しかったです。

私は、身内に亡くなった人がいないので苦しくないんです。家や物は直せばいいし、物はなんとかあります。支援物資は、早い段階から要らないと思って、3回目で断りました。宅配便の人に「おめでとうございます」と言われたんです。3. 11は人生の一ページ。前を向いて生きていれば、必ず乗りこれられます。日本は平和ぼけです。物をまだ追い求めているじゃありませんか。3. 11のあれだけの被害なのに変わらないのはなぜ？ 伝わらないのはなぜ？なぜ学ばないのですか？

2013年に、アメリカからのボランティアの若い男性に、朝ご飯として、ベーコン、ウインナー、卵を作ったのに、ベジタリアンだと言われ、野菜と果物しか食べてもらえませんでした。3. 11の前に、犬が亡くなってよかったです。助けられなかったから。

5) 6人(二人が60代、三人が70代、一人が80代)

津波の潮が上がった屋根に穴が開いていて、修理中です。オール電化は危険です。昔の生活の方がいいと思います。今は、便利すぎて、生きる知恵がありません。危険を体でおぼえる必要があるのではないのでしょうか。シュロの木は昔、田んぼの水や井戸水をきれいにして漉して使うために植えていたらしいです。3. 11の時、旧式の電話がすぐつながりました。今の年寄りも、子供のころから自然の中で遊んで学び、サバイバル技術を習得していました。子供のころは、学校をさぼって、海で拾った魚を食べたり山で食べ物を見つけたりしました。近所には、怒るおじさんやおばさんもいました。

被災は、みんな同じだから誰にもすがれません。泥だしなど、ボランティアにはとてもお世話になりました。

自分の家は高台で無事だったので、家に避難してきた大勢の人の世話をしました。野菜は雪で汚れを落としました。卓上ボンベ、土鍋、反射式ストーブが役立ちました。風呂の水は、川から水を汲みました。

4日目に油揚げが届き、6日目に初めて外にでました。自宅の宝石を取りに戻った人が

抱いたまま犠牲になったと聞きました。

近所の声かけや町内会の運動会をやったり、誰がどこに住んでいるかわかるよう心がけたり避難所の名簿を作っておく方がいいです。地域ごとにまとまって仮設に住む必要があります。コミュニティの何十年ものつながりを切ってはいけないと思います。仮設に入っ
て、すぐ葬式という人もいました。ほとんど被災しなかった自分は、なんて幸せなのかと
感じる反面、申し訳ない気分です。それで、ありったけの野菜を、ふるまいました。

高台の住宅は何も支援がありませんでした。二か月の赤ん坊のおむつやミルクを、地震
から5分の間で、すばやく売ってくれた店があり感謝しています。

命が助かったことも、大変なことで、一生せおっていくんですね。まだご遺体が上がっ
ていない、みつかっていない知人がいます。50歳で夫が病気になり、収入がなくなり、
それから懸命に生きてきました。震災以降、前にやっていたボランティアの経験が役だち
ました。避難マップは家にいれば役立つけれど、どこにいるかわからない状況です。火お
こしなどの防災訓練が必要だし、どこに逃げるか考え、自分で身を守ること。そして健康
でいること。車椅子や寝たきりはだめ。寝たきりの子供を残して逃げるわけにはいかない。

ここまで津波はこないからと安心していました。家があるだけでいい。ひろってきた木
で薪のストーブを作りました。保険は大切。

とにかく油断せず逃げること。一人だと逃げるけれど、二人だと死ぬ割合が大きい。
今は、ボランティアとの付き合いが生きがい。海外からも支援があって嬉しい。友達が
大切。女性は家の守る役割があります。守るために生かされたと思います。女性はきもが座
っていて、冷静になれます。女性は、まず「ごはん食べた？」と聞きました。落ち着い
てから行動します。知恵とがまん、しなくちゃと思ったり、頼られることで、生きることが
できました。一人では生きられません。寝たきりでも夫がいた方がいい。台所や料理が
大切で、食べることが一番重要です。声掛けが嬉しい。

物事を、いい方にとって、前に行くしかありません。どうせだったら楽しく、心は豊か
に、自分を大切に、ごほうびをあげたりします。目から笑顔になって、気持ちを豊かに
したいです。

未亡人（一人以外）で、運が強く、生かされたと実感します。海が見れない防潮堤って、
必要でしょうか。体験談を吐き出すことで楽になります。海がある石巻は海はなくせない。

ちぎり絵、洋裁、料理、友達づきあい、生け花、孫（三歳）との会話、ちりめん細工、
カラオケなどが、生きがい。健康だけでいい。子供達に迷惑をかけないようにしたいです。
スケジュールいっぱい、考えている暇がありません。老後のお金をためなくてははいけ
ません。

昔は船が入ってきた堀があつて。水路がめぐっていた石巻です。オリンピックって必要？
材料や労働者が石巻に必要で、人件費が高くなり、高騰する資材。復興に回してほしい。
オリンピックに反対。計画性のない、いきあたりばったり石巻の街づくりで、無駄なお金
を使う復興です。盛り土や防潮堤で、海が見えません。人が住まないのに。

6) Kさん、70歳代

2016年9月7日

3. 11の日は、足が悪くて入院していました。津波が建物や車を流していくのを見ていました。日本沈没というのはこういうことかと思っていました。自分の家や店(菓子店)も壊されて流されていくのを見ていました。

夫は義理の母と、近くの公民館へ避難しました。車で逃げようとしたのですが、車の上に瓦が落ちてきて、運転できる状況ではなかったそうです。歩いて避難しました。夫はもどって、店の片付けをしようとしたのですが、津波がくると感じ、すぐ逃げて無事でした。もし一分でも遅かったら危なかったでしょう。その後、病院には食料が備蓄されていなかったのので、私も避難所でしばらく暮らしました。そこで日本中、世界中の支援者やボランティアに会いました。その人達は、熱心に話を聞いてくださいました。特に日本語のわからない外国の方々が、わかろうとして耳を傾けていました。その気持ちに助けられました。夫は、津波の次の日に破壊された店の跡地に戻り、「ここにまた店を開く」という看板を立て、一人でがれきやヘドロの処理をしていました。海の底の、真っ黒いヘドロです。自衛隊がまず手伝ってくれて、それからボランティアの方が来て手伝ってくれました。若い人達の行動力には驚きました。私が若いころはボランティアなんて頭にまったくありませんでした。

私はこうして、震災の体験を話すのが好きなんです。震災の次の日から、しゃべっていました。誰かを亡くした人は、こうしてしゃべらないでしょうね。私は話すことで、気持ちが落ち着くんです。2015年の春に、店を再開しました。ボランティアで遠方から来ていた男性が、たまたまお菓子屋で、もう店をやめようかと思っていた人でした。その人に会ったことで、私たちは再開できました。というのも、その男性の店にあった、お菓子を製造する機械を、譲り受けたからです。その人が、自分の店で使っていた機械や道具を、わざわざ車で運んできて、設置してくれたのです。私たちにとっては、使い慣れていない機械だったので、最初はちょっと戸惑いました。この店は140年の歴史があります。店の後ろに蔵があり、その上の方の棚にあったお菓子のガラスケースが助かって、こうして今、使っています。それから、その蔵には、昔の冠婚葬祭の時の朱塗りのお膳もあり、今こうしてお菓子を並べる陳列台として使っています。

命を守ることが本当に大切です。命がなかったら、何もできません。このあたりは、ほとんどの建物が津波で流されました。破壊されたものの、輪郭をとどめていた、この店に、ボランティアが道を聞きに来るんです。店の中で私たちが片付けをしていると入ってきて「ああ、ここはお菓子屋さんなんですね」と言って笑顔になりましたよ。船や車がひっくりかえって、ごちゃごちゃの道でしたけど、道を聞かれたんです。

7) Sさん、50歳代

2016年9月8日

3. 11の午前、岸壁で種牡蠣の作業をしていました。夫は万石浦に行っていました。

私は仕事の後、午後に石巻市内の実家に娘と一緒にお米をいただきに行きました。米がきれていて、その晩食べるコメがなかったので。実家ですごい揺れを感じました。実家は地盤が固いので大丈夫でした。大津波のサイレンが聞こえていました。それから2か月間、実家でお世話になりました。地震の後は、水道が止まることを知っていたので、20分ぐらい水をため始めました。浜の人は津波がくると高台の寺に避難することになっていました。

夜、火のついた船や車を見ました。3日目に夫が軽トラで迎えに来ました。情報がないので不安で心配でした。知らない人が車のエンジンをかけっぱなしにして、携帯の充電をさせてくれました。ガソリンもないのに。3時間列に待って充電をさせてもらいました。自宅は2階の天井まで水がきました。浜に戻り、作業場や集会所がほしいと思っていて、支援団体が、コンテナの建物を提供してくれました。私はかねてから、新鮮な魚をどうにかして加工商品にしたいと願っていました。あなごの真空パックとか。

生き残った牡蠣をどうにか生かしたいと思い、無料でボランティアに食べさせたいと思い、復興感謝祭を2012年に開催。無料でふるまったのですが、たくさんの人達が、こっそりお金を置いていってくれました。それから牡蠣小屋テントを毎週末に開きました。養殖が壊滅したので、しばらく仕事もなく、いろいろアイデアが浮かびました。牡蠣むき場が最初に完成し、焼き牡蠣、牡蠣そば、牡蠣グラタンとかを提供する食堂を開きました。遠方の人がおいしいと感動してくれました。仮の店舗で、店をだしていたらタレントの人が来て、グラタンの作り方ををおしえてくれました。

3. 11前から、4つの浜から女性4人が一年に一度集まってガールズトークをしていて、それが楽しみでした。今の食堂は、1人ではできず、4人だったからできたのでしょう。牡蠣の燻製、炊き込みご飯、佃煮も作っています。大きい旅行会社のツアー客のために、弁当作りもしています。その弁当に、ちょっとつけた牡蠣の佃煮がおいしいと言われ、この食堂がツアーのランチの場所に選ばれました。100人の応募で40人が選ばれるツアーらしいですよ。牡蠣の食べ放題とかのランチをしたこともあります。「浜のかあちゃんの津佃煮」として、その旅行会社がラベル、ビン、コスト計算、ホームページなど手伝ってくれました。

現在も、バスでボランティアが来て、おいしい弁当とおみやげを買ってくれます。秋サケ、いくら、サバごはん、あら汁、ホタテごはん、ホタテを二つのせたどんぶり、アジのつみれ汁など、ああでもないこうでもない工夫しながら話します。季節の魚をいかし、地元のおいしいものを「作ったらいっちゃ」という一言が始まりです。4人の各自の長所をいかしつつ。

私の母は、洋裁ができて縫製工場に勤めていました。父は島の出身です。子供のころ、ウニをバケツいっぱい食べていました。浜の夫と結婚後、小さい地区なので幼稚園や小学校で役員が回ってきて、会報作りとか企画とか、文化部みたいなもので経験を積みました。障害者との交流企画をして、感動しました。

先は考えません。目の前のことを一生懸命やるだけです。一人ではできませんから、仲良く楽しく友達とやります。みんなで話しているとアイデアが浮かびますよ。うっぷんを話したりね。新築8年目で被災。家をきれいにしてから解体するよう掃除していたらボランティアが手伝ってくれて、修復することになりました。特にアメリカの団体が、柱をうまく修復してくれました。世界からの支援はありがたく、道から玄関までの通路を韓国人が作ってくれ、テレビドラマで覚えた韓国語をつかって「カムサミダ」。

すべて心がけしだいです。いい方向に、何があってもいい方へいくのかなあ。じっくり考えず、思ったらやってしまいます。かあちゃんが元気だと浜が元気になります。漁業は毎年収穫量が違って、去年が大漁でも今年是不漁の時があるから、気持ちが強いのかもかもしれません。